

会津大学短期大学部研究年報第58号 pp.97～105 (2001)

資料

夏目漱石未亡人・鏡子の手紙

近藤 哲

資料 夏目漱石未亡人・鏡子の手紙

夏目漱石(1867-1916)とその弟子・門下生たちからなる漱石山脈のなかに、皆川正禧(明治10・1877-昭和24・1949)という英文学者がいる。この人物については既に『会津大学短期大学部研究年報第53号』(1996)の「英文学者・皆川正禧の業績—翻訳を中心にして(1)—」でも触れたが、現・新潟県東蒲原郡津川町に生まれ、明治36年4月から6月まで、英国留学から帰国したばかりの漱石から英文学の講義を受け、その講義録を『英文学形式論』(岩波書店 大正13年)として世に出したことは周知の事実である。正禧と漱石の交流は漱石の死去まで続いたが、漱石死後も未亡人・鏡子(明治10・1877-昭和38・1963)との交誼はあったと推測される。

今回、正禧の大学時代のノートを整理していたところ、鏡子から正禧宛の手紙が3通、封筒のみが1通見つけた。3通のうち封筒入りの私信が2通でいずれもペン書きで、残る1通は漱石二十三回忌法要の案内状である。ここでは2通の私信を中心に、手紙のコピーも掲載しながら資料として公表したい。

第1の手紙

封筒(横9.7センチ×縦14.5センチ)の表には、「新潟県東蒲原郡揚川村西 皆川正禧様」とある。7銭切手1枚が貼付されている。消印は年号が10とも19とも読まれる。その右側の「11 28」の数字は鮮明に読める。『値段の明治・大正・昭和風俗史』(朝日新聞社 昭和61年)の「郵便料金」によると、封書の切手代は昭和19年4月から7銭となり、翌20年4月から10銭となっているから、年号は19年であろう。つまり昭和19年11月28日の消印である。裏は「東京大森区上池上町四四五 夏目鏡子」とあり、さらに「11」の算用数字がある。11月の意味と推測される。

手紙は便箋(横18.0センチ×縦25.7センチ)2枚に縦書きで14行にわたる。その活字起こしは本誌の体裁に従って横書きで示す。改行は手紙に従った。紙面の関係上、活字起こしの手紙文から示す。なお、コピーは4枚とも実物の70%に縮小したものである。

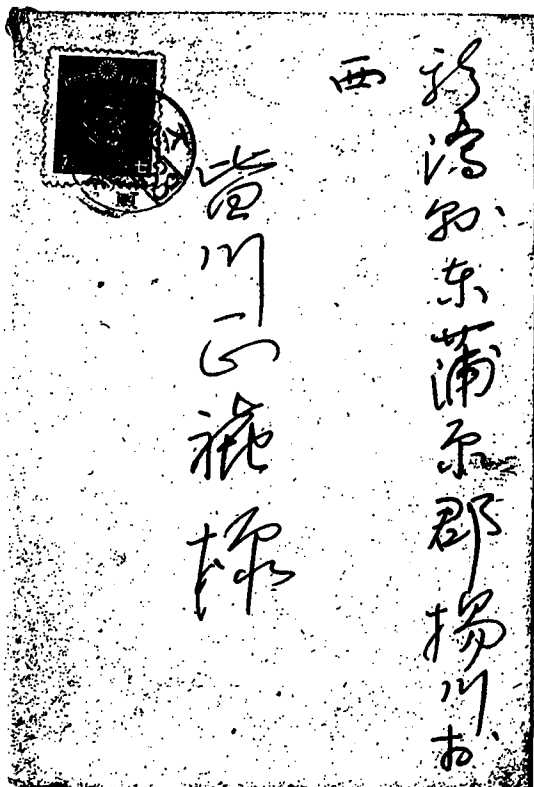
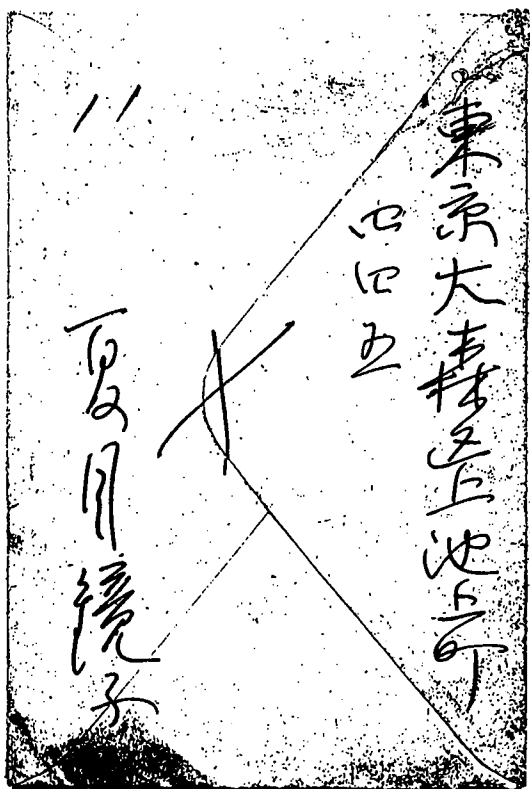
久しく御無沙汰申上て居りますだんだんと
御寒さに向ひます御変りもございませんか、
御伺ひ致します私方も兎に角としてはた
らいて暮らして居ります実ハ先頃も御願
申上ました炭の事でございますが配給は
ますます悪く何を申すもがすのなき處にて
煮たきも致さねばならずいろいろのもの残

買ひあつめ代用と致し居り真共何としても元
 は炭にて致さねば火がつかずこまり居ります
 誠に勝手なる御願ひながら も志御地にて
 炭がやけますなら何とかして送て頂き度と
 思ひますが如何なものでございま志よう御願ひ
 申上ます勝手なる御願ひまで相すみません
 どうぞよろしく御願ひ申上ます

夏目

皆川様

十一月



久しくは尋ねた中りておろしあすたれくと
はまらまの向ひますりておろしあすたれくと
さ何の跡もあらず和方と免ふ判とししてをた
らりて尋ねらしておろしあすたれくと
中りてた炭のろりてを尋ねるか配後と
あましく雲く何をやらすもかすのあすたれくと
煮たすしと跡もあらずならぬくろりて
雲いあつた代用と跡もあらずならぬくろりて
左山伏もし跡もあらずならぬくろりて
識りし勝子もあらずならぬくろりて

笑をわけますなら何せうして送て頂かえと
思ひますかぬ何なものでございませう
ナリませう勝年さまはねいよそおすません
とうげようしくはねいナリませう

夏月

岩川様

十一
日

第2の手紙

封筒は第1と同じサイズであり、表記も第1とほぼ同じであるからコピーは省略する。5銭切手1枚と2銭切手1枚貼付され、「19 12 28」の数字がそれぞれの切手の上に押印されてある。昭和19年12月28日の消印である。宛名は、住所の西のあとに「村」があるほかは、第1と同じである。裏面は記載日と思われる「12.28」の外は、第1と同じである。手紙は便箋(縦20.7センチ×横29.5センチ)1枚で、16行にわたる。なお、コピーは実物の50%に縮小した。

子と申すおしり...
 今年特別に御寒い事で御地ハ
 如何でございます可皆様御変りなき
 御事と存じ上ます御送り下さります小包
 やふやふに届きました何よりの品々
 こと耳魚不足の折から誠に
 うれしく皆大よろこび致して
 山灰... 付... 勝...
 ... 折... 味...
 ... 松岡...
 ... 何...
 ... 又...
 ... 取...

もはやおしつまりましてございます
 今年特別に御寒い事で御地ハ
 如何でございます可皆様御変りなき
 御事と存じ上ます御送り下さります小包
 やふやふに届きました何よりの品々
 こと耳魚不足の折から誠に
 うれしく皆大よろこび致して

居りますあつくあつく御礼申上ます
炭の事に付きましてもいろいろ勝手
ばかり申上て相すみません折を見て
いづれ松岡が来上致す事と存
ますよろしく御願ひ申上ますこちら
よりも何かと存じ居れどとれと申
ものもなく又例の能り少々御送
り致します御受取り下度ねがひ上候
先ず御礼まで 草々

第3の手紙

封筒のみで手紙はない。封筒サイズは上2つと同じ。表の表記は第2と同じ。7銭切手が1枚貼付され、消印は「17」の数字のみが読める。裏面の差出人住所氏名は第1と同じで、さらに「716」の数字が記載されてある。昭和19年7月16日が手紙の日付であり、消印が翌17日である。

第1、2の手紙の付帯状況について簡単に述べておきたい。正禮が郷里に隠遁したのは終戦前年の昭和19年であり、上掲の鏡子の手紙はその年のものである。二人とも同年齢の67歳で、老境にあった頃の手紙である。正禮の郷里は現在でも山の幸が豊かなところであるが、生前の漱石はそうした山の幸の恵みにあずかっている。漱石から正禮宛の書簡は岩波全集に26通収められているが、その中には正禮の郷里の「ゼンマイ」や「鮎」「百合の根」などに対するお礼の言葉も認められており、正禮は折に触れこうしたものを贈ったのであろう。

野田宇太郎の『六人の作家未亡人』（新潮社 昭和31年）の「荊の冠をもてあます 夏目漱石未亡人鏡子さん」によると、鏡子が早稲田南町から上池上の家に移ったのは昭和12年であった。小高い丘の上の見晴らしのよい場所にあって、なかなか豪勢な家であつたらしい。その頃はまだ印税もどしどし入って、金銭的には困らなかつたらしいが、19年頃は戦時中の物不足の折であり、鏡子や娘婿・松岡譲たちの窮乏生活は大変であつたことだろう。ガスの供給もなく、燃料には苦勞した様子が窺われる。そうした中、正禮が家で焼いた木炭を分けて欲しいという願いの手紙が第1であり、正禮の送った炭や魚に対する礼状が第2の手紙である。

鏡子口述、松岡譲記の『漱石の思ひ出』（岩波書店 1982）「一〇 長女誕生」には次のような一節がある。

長女が生まれましたのは、五月の末のことでありました。私が字が下手だから、せめて此の子

は少し字を上手にしてやりたいといふので、夏目の意見に従ひまして、「筆」と命名致しました。ところが皮肉なことに私以上の悪筆になつて了つたのはお笑ひ草です。で、今ではそんな慾張つた名はつけるものでない、そんな名をつけるからこんなに字が下手になつたのだなどと、當人の筆子はこの話が出る度にかへつて私たちを恨んで居るのです。親の心子知らずか、子の心親知らずか、ともかくお笑ひ草には違ひありません。

自分は悪筆であるという思いのせいかどうかはわからないが、鏡子は英国留学中の夫にあまり手紙を書かなかつた。漱石が、妻の筆不精に不満を漏らす手紙は、漱石夫婦のあり様を垣間見させてくれ興味深いものがある。上掲の手紙から鏡子が悪筆であるかどうか筆者には判断がつかないが、彼女の筆跡からある程度の性格判断はできそうである。まず男性的な文字であることは衆目の認めるところであろう。第2の手紙には「候」という表現が見えるが、女性は普通用いない言葉らしい。ともあれ、物事にこだわらない、楽天的で自然で淡泊な人柄を偲ばせる文字であり、文章である。物事にこだわらないということは、逆に他人への思い遣りが希薄であるということであり、のほほんとして、ずぼらとも言えるわけである。異国の寂寥とした孤独な世界で英文学と格闘しながら妻の手紙を待ち焦がれる留学中の夫に対して筆不精であつたのはその一例といつてもよく、また、早稲田南町の漱石山房は漱石遺宅として貴重な文化財であつたが、それを平気で手離してしまつたことなどもその例と見なすこともできようか。「鏡子さんはそれを惜しむ人でもないようである」と、鏡子にインタビューした野田は述べている。何事にもよく気のまわる夫・漱石と鏡子の心理的齟齬は『道草』にも詳しく描かれているところであり、それが弟子たちが鏡子悪妻説を形成するひとつの典拠になつたと言われている。

第4の手紙

封筒表には「杉並区善福寺町九八 皆川正禧様」と墨書され、4銭切手が貼付されている。「13 12 4」の消印がある。裏面には「東京市大森区上池上町四四五 夏目鏡子」と活字印刷され、さらに「十二月一日」と墨書されている。資料としての価値はないだろうが、参考までに案内状本文(活字)を改行せずに掲載する。

肅啓

来る十二月九日午後二時より小石川區茗荷谷至道庵徳雲寺にて(市電大塚線清水谷停留所前)文獻院二十三回忌法要相宮み申候に付御参拜被下度候此段御案内申上候

尚引続き同夕五時半より上野精養軒にて素餐差上申度候間何卒御光来の程願上候

敬具

昭和十三年十二月一日

夏目鏡子

皆川正禧様（墨書）

追白 甚勝手がましく候へ共準備の都合上精養軒御出席の有無折り返し御通知被下度願ひ上候

(注)夏目漱石及び皆川正禧のご親族より快諾を得て手紙を掲載することができた。感謝を申し上げます。

